

壽量本佛論

堀内義光

第一章 當家の本佛觀

第一節 當家の顯本論

當家の壽量顯本は支那天台の報身事顯本に比すれば法身理顯本と云ふべく、若し中古天台の理顯本に對すれば反つて事顯本を成ずと云ふべきなり。何んとなれば一往理顯本々覺の如くなるも、能顯の智用に即して立つる本覺無作三身なれば境地冥合。人法不二の人格的本佛にして哲學的性徳の三身に非ず、宗教的修徳の三身を離れざる修性不二。始本一如の重に於ける本佛なり。然しながら是れは我宗の信唱成佛の妙處、究竟の宗教的心地にして一度是れを教相門に移す時は茲に相對的に能顯の智用と所顯の本覺とを分ちて論すべきなり。

即ち當體義鈔縮刷道文錄九九三頁に

釋尊五百塵點劫、當初證_ニ得_テ（始覺）此妙法當體蓮華_一（本覺）世々番々唱_ニ成道_一（應_ニ顯_ニ能證_ニ報_ニ所證_ニ法_ニ）

本理云々。

とて祖文に性徳本覺と修徳始覺とを分てり。而して此の五百塵點は我家に於ては實數とするに非ずして非數無始本有と解すべきなり。

經文壽量品に

無_レ有_二生死若退若出_一、壽命無量阿僧祇劫常住不_レ滅

と云ひ、祖文御義口傳下一七丁には

此の品の所詮は久遠實成なり。久遠とは、はたらかさず、つくろはず、もとの儘と云ふ義なり。無作の三身なれば、初めて成ぜず、是れ働かざるなり。卅二相八十種好を具足せず是れ繕はざるなり、本有常住の佛なれば本の儘なり。是れを久遠と云ふなり。久遠とは南無妙法蓮華經なり。實成_{（まことに成りたり）}無作と開けたるなり云々。

と云ひ、灌頂鈔一〇二九には

此品、觀心_{（ト）}者妙法一心之如來壽量品_{（ナル）}故_{（ニ）}我等凡夫、一念_{（リ）}。一念、卽如來久遠、本壽本地無作ノ三身本極法身、本因本果、如來也云々。

と云ひ、本尊鈔九三九には、

我等_{（ガ）}己心、釋尊ハ五百塵點乃至所顯ノ三身_{（ニ）}無始ノ古佛也云々。

と云ひ、又全

佛既過去不_レ滅未來不_レ生所化以同體此卽己心三千具足三種世間也云々。

と本佛（本體）の常住を説けり。故に佛説の五百塵點は唯是れ假説にして、伽耶始成の始覺佛の内證直ちに本覺の古佛にして、所顯の覺體本覺無作三身が文上報身に依りて顯されたる文底の常住本佛なり。然るに従來先哲中往々にして未だ顯本の本旨を得ざる者あり。今其二、三を擧ぐれば、

一に啓蒙講師なり。卽ち啓蒙 縮刷四九八に

勿論天台ノ釋ノ如ク釋迦ノ塵點ニハ東方五百萬億等ヲ譬トシテ顯シ、コレヨリ久キモノハ四方ヲ以テ譬トシ、又久キモノハ十方ヲ譬トシテ顯スベキ推量ノ義アリトイヘトモ、一代說經ノ内現量ノ顯ス處十方三世ノ佛ノ中ニ釋迦ヨリ久キハナシ、因_{（レ）}茲釋迦ノ最初實成ノ處ニヨセテ無始本覺ノ理ヲ顯シ、從本垂迹ノ始成ノ相ニヨセテ始覺ノ道理ヲシラセタルモノナリ云々。

と云ひ、又五三七

一代說經ノ中ニ釋尊ヨリ久シキ佛ナケレバ、コレニ詫シテ無始佛界本有ノ深旨ヲ談スル時ハ十界三千ノ依正サナカラ無始ノ覺體ト顯レ、我等ノ如キノ迷位ノ衆生ノ色心全ク釋尊ト同等ナリ云々。

と、これ講師が未だ五百を以て超時間的非數とする能はざるに基くものにして、斯くては壽量品の本佛とは本有常住の云ひに非ず、唯だ比すべき者無き最古の先覺者と云ふに止りて心理的・經驗的・時間的重に於ける限定者としての所談なるを以て、その釋尊は絕對者本佛と云ふ事能はず諸佛並存中に於ける最先覺者、相對者中の最優越なる佛と云ふに過ぎざるなり。隨て斯くの如くんば十界顯本と云ふ事能はず、釋迦一佛上の所談にして我祖の塵點且立の實義に達する事不可能なるは勿論、未だ天台の事顯本の分域を出でざるなり。最古の佛なるが故に無始に等しとは倒逆的論法なり。我祖の意は文底は超時間的無始なるが故に若し文上・時間的・經驗的・心理的・發生的に約する時は最古とせざるを得ざるなり。

二に觀如透師の顯本論なるがこれに就きては輝師が綱要正義 充治園全集三卷二五七の中に「專論・塵點久成假説」而始成即久成是實義」と云へる如く講師の所説に一步を進めたるも、その瓊玉の微瑕とも謂つべきは透師の顯本論に於ける左の如き諸文なり。

凡諸法有リ來タ世々番々諸佛無盡ナリ。其中指ニ最初佛一故名ニ無始久成、如來ト是則惣指ニ最初一佛、因果事成ニ通ニ爲ニ無始ト云々。セ丁右

是則第二番已去ハ有レ本故ニ約ニ本佛ニ説ニ事具ニ第一番佛ハ無レ本故ニ直ニ約ニ本法ニ説ニ事具ニ道理必然ナリ

不レ可ニ凝滯ニ註因ニ曰ク所レ言フ第一番及二番已去ト者惣テ就ニ一切諸佛ニ指ニ最初無始一佛ヲ爲ニ第一番也。大師ノ所判ハ別、就ニ釋迦一佛ニ立フ第一番等ノ語ヲ故ニ非ト必ト指ニ無始佛ヲ爲ニ第一番也。隨雖同謂ニ第一番ノ説ハ無ニ顯本ニ而共義各別、不レ可ニ混同ト云々。八丁左

と云へり。斯くて第一番の佛は顯本無きが故に經文の諸佛如來法皆如是（壽量品）の眞印より除去するに至れり。此れ透師が無始と謂ひつゝも未だ時間的觀念を脱する事能はざるに基因するなり。斯くの如くんば最初第一番成道の佛は顯本すべき本佛無く事の常住をも説く事能はず、故に理性常住の本法諸法實相の妙法蓮華を會得して成道すと云はゞ、譬ひ釋迦一佛に限らず惣じて一切諸佛に就て最初一佛を以て諸佛の上位に居し此れを統括すと雖、事具の常住は諸佛の如き成道者のみの感見する世界にして九界の衆生は唯是れ因中所具・理性常住あるのみ、且つ法界事の本佛の義は成立せざるを以て諸佛所師所謂法也を以て宗義とせざるべからず。斯くて得る本佛は限定的個物的なるが故に斯くの如き論理を以てせば其本尊の解釋に至りては傍尊は人格とするも中央の南無妙法蓮華經は必然的に法とせざるを得なく成り、その本尊は信仰の對象とするには未だ充分なる事能はず。愚見を以てするに、信仰の對象は必ず人格たる事を要するなり、若し法を（眞理）以て對象とするならば信念は生ずるならんも信仰は生ずべきに非ず、故に宗教的信仰の對象は必ず人格尊ならざるべからずと考ふるなり。若し

夫れ法を以て對象とするも尙は宗教が成立するならば宗教は單に思想であり觀念形態なるを以て「是等は質物の進行過程に生ずる陰影なり、すべては唯物辯證法的實證を以て必然的因果的に進行發展するものなれば此の眞理を把握し、人爲的努力を拂ふてより早く進行發展せしめて共產社會を創造せばそこに現るゝ宗教にしる、思想・政治・法律・哲學・藝術にしるすべての世界平等が眞實となる故に一切のものゝ解決は共產社會の創造にあり」との信念を有するマルキシストも宗教家でありその眞理は宗教的對象と云ふべき結論を生ずるならん。透師の説未だ充分ならざる事知るべきなり。

三に導師の顯本論なるが祖書綱要の刪者壽師が「是所_ニ以余謂_ニ義備而言脫言餘而缺_一也」と云へる如く此れ亦必ずしも完全なりとは言ひ得ざるなり。即ち祖書綱要刪略三ノ一九に

如此一法_ハ（無作三身）世尊久證之後、二番以降世々_ニ所_レ顯之本也云々。

と云へり。刪者はそれを破して「初成仍應_ニ指_レ之顯_一之何待_ニ二番已去_一、若不_レ然者新成應_レ無_ニ顯本_一乎云々。と云へり。又導師は二五左

所_レ言本佛者所證_レ本極法身也、迹佛者二番已降十方_ノ諸佛也云々。

と、凡そ迹佛とは始覺に名け本佛とは唯だ所顯の無始本覺三身に限るが故に第一番の成道と雖も亦迹佛なり。設ひ五百億塵點を更らに、延長すとも始覺の成道者あらば必ず迹佛なり。若し第一番の成道な

るが故に本佛と爲さば何處に台當の差あらんや。

四に刪者壽師の説を一瞥するに、祖書綱要附錄四左に

經文_ノ五百塵點_ハ應_ニ是_レ表_ニ示本有_ノ五大_ニ釋尊既_ニ爲_ニ無始_ノ古佛_一、縱_ニ舉_ニ十方_ノ爭_ニ足_ニ比量_ニスル_ニ若大師_ハ順_ニ久遠_ノ始覺_一但宣_ニ文上隨他_ノ一邊_一所以_ニ隱_ニ覆_ニ所表_ニ實事_一也、今謹_ニ義推_ニスル_ニ本初成道_ハ必有_ニ顯本_一、說_ニ言_ハ然_ニ我_ハ實_ニ是無始本來自證_ノ三身十方法界_ヲ以爲_ニ身主_一我_ハ即三千世間_ノ總體_ヲ爲_ニ度_ニ衆生_一現作_ニ釋迦_一等云々。恐_ハ如_レ斯云々。

と云にり。若し本初成道は直ちに無作本覺を顯説すと爲さば三世諸佛同道の化儀を失せん。此れ最初の成道も亦有始に寄せて無始を説く事今番成道の釋迦と何等殊る處無きなり。

上來の諸師斯くの如き誤りあるは未だ全く塵點且立に徹せざるが爲なり。新古を問はず一佛成道すればその佛の内證必ず是れ本佛なり本覺三身なり。故に時間的には新古空間的には諸佛並存の迹佛ありと雖その迹佛の内證何れも本佛一佛なり。茲に於てか本佛の眞理性・人格性は主觀的觀念的なるものに非ずして、普遍的・必然的・客觀的・妥當性を有するものなり。我家の悉皆成佛の原理は茲に成立するものなり。彼のマルキシストの如き宗教を以て主觀的・觀念的・迷妄論となすの徒は宜敷來て我宗の教學を學ぶべきなり。普遍的・必然性としての本佛が限定的・個性として成道化現の状態を説くに

五百億塵點世々番々の成道を以てせり。然るに天台流の解釋は釋迦一佛（相對の二）の所談なるを以て勢
ひ最初第一番の成道を以て本佛とせざるを得ず、又此の第一番成道の佛は中道實相の眞理を把握する
事に依て成道するなり。我家に於ては然らず、此第一番成道も亦迹佛なり。何んとなれば經驗的現象世
界に現るゝ個物としての佛は皆迹佛にして此の迹佛をして迹佛たらしむるもの、換言すれば迹佛の背
後に潜むる本質的佛即ち普遍的・必然的・客觀的・妥當性を有する本佛こそ我家顯本の佛なればなり。
斯くてこそ五百億塵點は釋迦一佛の永遠性にあらずして、本佛の常住性であり、塔品の分身來集に依て
表現せられたる普遍性と相俟て人格的本佛の無限性は時・空の上に象徴せらるゝと解すべきが我家の
壽量本佛觀なり。是れを以て第一番已降世々番々三世諸佛の化儀は同道と云ひ得るなり。壽量顯本の佛
は本佛なるが故に十界事の常住なり。然るに若し塵點久成の説無くば佛界常住未だ顯れず、若し二乘成
佛の説無くば十界互融未だ顯れず、迹門若し十界を融せずば設ひ塵點の説有るも能く三千常住を顯す
事を得んや。故に或示己身。或亦他身とは無始十界を謂ひ、無有生死若退若出とは本有常住を謂ふなり。
是れ十界事常住の明文壽量談理の要處にして塵點久成の所詮正しく是れに在るなり、されば塵點久成
の意は佛界の無始を顯し、普現色身の意は九界の無終を顯すなる。又六萬恒沙四大唱導は密に十界を表
し、本行菩薩道所成壽命今猶未盡は又是の意九界常住に在るなり。若し但だ塵點遠壽を談ずればその

理終に諸經の常談に歸す。何んとなれば事の遠壽をのみ論ずれば恐らく未だ戲論の謗を免れず、若し
單に佛界常住を詮せば又未だ諸法實相圓常具足の義を顯すに足らざるなり、設ひ佛身の遍一切處を談
ずるも亦但だ理法身常住の義に歸し、一切世間毘盧遮那所成一色一香無非佛身と説くも亦未だ九界を
捨てゝ一佛界を求むるの執情を破するに足らざるなり。十界事の常住を聞かざれば法身流動して九界
を成ずと執するが故なり、我家の顯本こそ十界顯本無作常住なり。故に灌頂鈔一〇二八に

此品ノ肝要者明ニ釋尊ノ無作三身ヲ欲レ令増進セ弟子ノ三身ヲ乃至此三身ハ雖ニ無始本覺ノ三身ニ立ニ
五百塵點劫ノ成佛ヲ三身即三世常住ニ今弟子ノ始覺ノ三身亦如我力顯可成ニ三世常住ノ無作也云々。
と云ひ、御義口傳下ノ一〇右には

當品の意は我とは法界の衆生なり、十界已々を指して我と云ふなり。實とは無作三身の佛なりと定
めたり、此れを實と云ふなり。成とは能成所成なり。成は聞く義なり、法界無作の三身の佛なり
と聞きたり。佛とは此れを覺知するを云ふなり。已とは過去なり。來とは未來なり。已來の言の中
に現在是有るなり云々。

と云ひ又下四三左

本門、の心は無作三身を談ず。此無作三身とは、佛の上ばかりにて之を云ず。森羅萬法を自受用身の

自體顯照と談ずる故に、迹門にして不變真如の理圓を明す處を改めずして、己々の當體無作三身と沙汰するが本門事圓三千の意なり。云々。

と云ひ、上野殿後家尼御前御返事一〇五二には
壽量品云。我實成佛已來無量無邊等云々。此經文に我と申は十界なり、十界本有の佛なれば淨土に住するなり云々。

と云へり。是れ祖文に顯れたる我家の十界顯本なるが佛の本地の顯さるゝ時十界事常住森羅三千の當體其盡本有無作と顯れ衆生の心身亦是れ本覺三身の如來なり。されば御義口傳下五六右に

此の品(分別品)は上の品の時、本地無作の壽を聞く故に、今品にして上の無作三身を信解するなり。其功德を分別するなり。功德とは十界己々の當體の三毒の煩惱を此品の時、其儘妙法の功德なりと分別するなり云々。

と云ひ、三世諸佛惣勘文鈔一八九七には

己心_ト心性_ト心體_ト三_ハ己身_ハ本覺_ハ三身_ハ如來也。是_レ經_ニ說_{ヒテ}云_ク如是相_ニ應_ニ身_ハ如來如是性_ニ觀_ニ身_ハ如來如是體_ニ法_ニ身_ハ如來 此_レ云_フ三如是_ハ此_ハ三如是_ハ本覺_ハ如來_ハ十方法界_ヲ爲_シ身體_ト十方法界_ヲ爲_シ心性_ト十方法界_ヲ爲_シ相好_ト。是_レ故_ニ我身_ハ本覺_ハ三身_ハ如來_ハ身體也。周_ニ徧_ニ法界_ニ一佛_ハ德用_ハ一切_ノ法_ハ皆是佛法也。說給_{ヒテ}

時。列_ニ其座席_ニ諸_ノ四衆八部_モ畜生_モ外道等_モ不_レ漏_ニ一人_モ皆悉_ク妄想_ノ辭目_ハ僻思_ハ立所_ニ散止_{シテ}還_ニ本覺_ノ寤_ニ皆成_ニ佛道_ニ云々。

と云ひ、灌頂鈔一〇二八には

迹門_ハ從因向果十如十界成佛三周_ノ聲聞等是也。本門_ハ此十如十界_ハ從本垂迹無作_ノ十界_ハ普現難思行相_{ナルベシ}云々。

等と云ふに見れば我家所顯の本覺は十界無作の義なる事諸文明白なり。然らば佛壽の久遠は何が故に此義を成ずるやと云ふに、夫れ十界の因果は爾前に既に説きたり。但だ隔別を以て永く得道無し、今經に至つて十如實相を説くに爾前の隔情頓に融し方に不變真如の一理に歸し、教主已に十界具足の圓佛を成じ所化又同體と爲すなり。然れども是れは但だ理性に具を論ずるのみなるが、本門に至つて此の圓佛を説いて我實成佛と云ふに此の我豈翹だ一佛界に局らんや、通じて十界實成を顯せり。是れに於て迹門理圓の三千の當處全く自受用身本覺の智體を成ず、是れを本門事圓の三千と謂ふなり。此の三千の外豈更らに一衆生の漏たる者あらんや。十界の身は皆古佛にして所居の土は常寂光土なり。上野殿後家尼御返事一〇五二に

我と申は十界なり十界本有の佛なれば淨土に住するなり云々。

と云ひ、法華宗内證佛法血脈九二〇には

所居既淨土也能居之人豈非佛耶云々。

と云へり。若し我實の文但だ佛壽を説くとは天台の義にして、當家には在世脱益の機は壽量文上を聞くの時、衆の増進は普く文底十界無作本成の意に達するなり。滅後末法の鈍機に對し直ちに品意を顯説する我祖聖人の使命推量すべきなり。

第二節 且立塵點に就きて

前節に於て我家顯本の佛は無作本覺佛なる事を述べしが、此の所顯の無作本覺佛を能顯始覺に即して論ずる處に我家の特色を視るなり。能顯の始覺とは經文の五百塵點の報身此れなり、然るに此の五百塵點劫は且立に屬するものにして無始本有の覺體を顯さんが爲めの巧用なり、若し五百億塵點修因感果を説かずして本佛を以て本來常住・無始法爾と云はゞ單なる自然覺にして、哲學的・抽象的・不變的・單體無用の非人格としての法身に過ぎざるなり、然るに修因感果の能顯の智用に即して顯さるゝ本覺の如來は宗教的・具體的・隨緣的・俱體俱用の人格的本佛なり、さればこそ必ず始覺即本覺を以て當家顯本の佛とするなり。然るに伽耶始成の述佛に即して無始本覺を顯本するに於ては五百億塵點且立の必要無きが如しと雖實には然らず、何となれば本地の境に冥する智はその儘又本有にして俱

體俱用の本有なるが故に佛は事の遠壽を得るなり、是れ自體顯照の智用にして、一度自身を本覺の佛なりと始覺する述佛は所顯の體が本覺無作なるが故に始覺の述用のその儘又無始本有の佛となり、茲に性修二德に約して本有の體用を論じ、且つ時間的には三世諸佛、空間的には十方の諸佛を統一し凡そ述佛と名けらるゝ者は悉く壽量本佛に依て生ずる分身なることを現し、本佛化源の五百塵點最古を通じて究竟の心地は無始にある事を會得せしめて、諸經に破せざる伽耶始成の執を破する事を得るなり。故に法華眞言勝劣事五〇〇には

法華經ノ五百塵點ハ諸大乘經ニ不破セ伽耶之始成破レヌ之云々。

と云へり。

更らに法華經が宗教的表現を取る上に於て新成の執を破するには久壽を用ゆるを最も可とするなり。是れ本門開顯の實義にして彌勒は父少子老の譬を出し佛の新成に對して「佛亦如是得道已來其實未レ久」(壽量品)と問へる短壽の疑ひに直ちに非壽を以てせば問答乖離して其義成せざるなり。故に佛は所問に應じて「我實成佛已來甚大久遠」(壽量品)と事の遠壽を以て答へ給へり。

今更らに輝師の意に依りて且立塵點を辨ぜば先きに久成を實と爲すの害に四あり。一には始覺の初めあるを以て無始無作の義を成する事能はず、故に台家に於て久遠の始成を立つる如きは但だ遠成を

貴ぶの一事に過ぎず、然かも文上實數に依るを以て遠成も亦始覺を免れざるなり。當家は無始無作を實義と爲す故是れを以て能顯の巧説とするなり。無始なるが故に始成の初め無く、無作なるが故に修因感果の義有るべからざるなり。若し夫れ壽量の文修因感果に約するは理性の久住法身單常に簡ばんが爲めなり。此の始成所證の久成は衆生所見の在經の法に殊り出經眞如の法なり。又三世十方の成道益物の三身は悉く同體なり、何となれば如來の一色身豎に三世に遍く、横に十方に週遍し佛身も衆生身も普く現じて盡くる事無きが故なり。斯くて一念三千法界の悉くを包容するなり。若し始成の初めあれば初成已前の無盡の諸佛無量の衆生或ひは未だ本覺果海に入るを得ず、或ひは異體の佛身を成じ理性は同ならんも事相は隔別を免れざるなり。過去既に斯くの如しとせば現未豈融すべけんや。斯くて如來の自證圓融の妙境全く顯れずして無作本成の三身を隱覆するなり。佛果初めあり、衆生の果終り有りて二者俱に無常なり。迷悟事法隔異し理融じて事融せず、理常にして事無常なり。斯くの如くならば天台の理の一念三千と何んの殊りかあらん。事の三千常住全く有名無實にして我家事の一念三千成ぜざるなり。二には新成の如來は顯本すること能はず。何となれば既に遠成に非ざれば談すべき久壽無く、顯すべき無始の三身無ければなり。若し理に約して説かば五百塵點久遠の始成は開迹顯本の實義を成ぜず。若し方便して塵點遠壽を説くと云はゞ今佛豈夫れ塵點且立ならずや。三には諸佛の化境

に廣狹同異を生ず。初住より妙覺に至る迄化事漸く廣きは位に別あるを以てなり。然るに若し妙覺の極佛に更に新古許多の不同有らば横に廣狹豎に長短ありて三身の不同を生じ無作三身を生ぜず、又分身地涌等の有無の説を生ずるに至るならん。四には事の一念三千を成ぜず。何となれば法界の生佛永く隔異を生ずるが故に、一佛の色心一切の色身を攝し、一切の生佛一佛の身中に入る事能はず、事の一念三千其義を失し、法界唯心の相成せず、釋迦の圓證顯れざれば在滅弟子の妙觀亦成ぜざるなり。

次に久成を虚と爲すの功を述べれば又四あり。一には壽量品は文上文底の二詮あるに非ず。文上文底は一往文。意の二を分つのみ。文意顯れ已れば義に二途無きが故に文上の遠成は但だ是れ能顯の法相、文底の本覺は久成の妙果一切有情同共の長壽のみ。是れ即ち一品に二種の所顯無く一文一義を成するなり。二には開近顯遠すれば諸佛の化事同なり。苟くも一佛成道すれば必らず遠成を顯す故開近顯遠差別ある事なし。同じく分身を集し俱に本化を召す。本壽命妙は積劫累徳の得る所に非ず、本覺は證得の一念を出でざるなり。本覺三身は法界を包籠し、唯一妙心他の生佛を融し、唯一妙身普く無始の依正を現じ、如來の知見方に其廣大深遠を見、衆生の無明を破し方に圓人の圓解を發する是れ諸佛の化導なり。三には三世諸佛の體用は同なり。即ち五佛同道なれば新無く古無く、體に廣狹なく、用に増減無く、事に長短無く、理に遠近無きを以て、佛壽の長短を諍ふは戲論なりとの謗を離れ、經文の

「諸佛如來法皆如是」(壽量品)の眞印に契ふなり。四には開迹顯本すれば事理共に法界周遍なり。但だ釋迦一佛開迹顯本して事の遠壽を得るのみならず、一切衆生又其の迹を開し、並びに果海普現の妙色身に住し、一切の諸佛其の本を顯し俱に常住の遠果に住するなり。是れを廣すれば一切の諸法一色一香體量無邊一々の法界等く事の三千を包容し、周く三世を含範し法々久遠の佛體に非るはなきなり。

塵點虛實の得失斯くの如し。夫れ開迹顯遠の妙説は實に佛智の内證を盡し、諸法實相の妙理を究め、佛陀の至智究竟圓極の談は、妙身と群生とを隔てず縱横無邊際にして一法として佛の色々たらざるは無きなり。開迹顯本の實義斯くの如くなれば、我家に於ては今番成道の釋迦の五百の事壽は且立にして、實には伽耶始成の當處無作本覺の如來なり。此の無作本覺こそ普遍的・必然的・客觀的・妥當性有るを以て如何なる人に於ても、時・處を問はず始覺の當處直ちに本覺無作三身の如來なりと且立を除きて本地に通達する事を得るなり。

第三節 壽量文上報身佛に就きて

壽量品の説相文は報身佛なれど意は法身なり。故に長行に報身の長壽を説くも、偈に至りては依報に寄せて本有の無始事の常住を説き、又涌出品には壽量を説かんとして諸佛の智慧・神通・獅子奮迅・威猛大勢等を顯發宣示せんと欲すとある智慧の語、暗に無作本覺を指すものならずや。壽量の「諸佛如

來法皆如是」と云ひ、分別品の「願我於未來長壽度衆生如今日世尊説壽亦如是」と云ふは皆正しく諸佛は本覺を顯せば新古・高下の差別無き事を云へるものなり。台家には壽量本佛をば文會・義便に依りて報身事佛とし、我家に於ても亦自行の修因感果の邊に約すれば報身佛と定むるなり。元より所顯の本覺は三身相即なる故、能顯の佛も亦三身中何れを正意と定め難しと雖斯くては絶對的第一義諦門の所談にして、相對的教相門上の談に非ざるを以て能顯所顯の區別を絶する結果となるべきなり。又所顯の三身中事の一念三千妙法蓮華事具の實相たる法體を顯すを正意とすれば、能顯も亦三身中法身を正意とすべきも法身は本來覺體にして因果を経修證に依りて初めて顯さるゝものにして始覺の行用無くば本覺の論すべきもの無きなり。壽量顯本は始覺即本覺。始本不二を論するが故に、若し法身を採らば能顯の義成立せずして、諸經常談の法身單常と同一に歸するなり。

又末代の機は以信得入なる故慈悲充滿の救濟主たる歴史上の釋迦應身を以て信仰の對象と爲し、その實在たる法身を顯本すれば如何と云ふに、應身即法身と顯本するは當家九界の衆生の始覺も、佛界の應身伽耶始成も共に所顯一なるを以て義に妨げ無しと雖經文の「我本行菩薩道所成壽命今猶未盡」の自行の修因感果の文に違するを以て報身始覺を採るなり。斯くて文上は報身始覺なるも文底に約する時は勿論十界なる事は御義口傳下一〇右に

當品の意は、我とは法界の衆生なり、十界己己を指して我と云ふなり云々。

とあるに見て明らかなり。更に

實とは無作三身の佛なりと定めたり云々。

と云へるは是れ所顯の本覺三身にして

佛とは此れを覺知するを云ふなり云々。

とは能顯の報身智用を指したるなり。此の報身が化他の行に互り衆生教化に従事する時はその儘應身佛なり。斯くて報身は經文・祖文合致し、道理に違せず、且つ信仰の對象としての人格的要求をも満足せしむる事を得るなり。

台家に於ても所成即法身の釋無きに非ずと雖是れ所證の道理中道實相に過ぎず、我家の本極法身十界無作本覺三身始覺即本覺の法身に及ばざるなり。報身に於ても台家は文上實數已前には報身無さを以て、五百億塵點劫の始覺が最初の報身佛なり。我家に於ては本覺は始覺に即して顯るゝ超時間的實在なる故に此の超時間的本覺(未有實存)果上の始覺(時間的現象的存在)を以て報身迹佛と爲し、壽量文上所談の修因感果の報身佛と觀るなり。さればこそ一度顯本し終て本覺果海に合一する時は始覺の迹佛の儘三身具足の人格的本覺法身となるべしなり。

第四節 三身に寄せて本佛を論ず

惣勘文鈔一八九七に

己心_ト心性_ト心體_ト三_ハ己身_ノ本覺_ノ三身如來也。是_ハ經_ニ說_{ヒテ}云_ク如是相(應身如來)如是性(報身如來)如是體

(法身如來) 此_レ云_フ三如是_ト。 此_ノ三如是_ノ本覺_ノ如來_ハ十方法界_ヲ爲_ス身體_ト十方法界_ヲ爲_ス心性_ト十方法界_ヲ

爲_ス相好_ト。是_ハ故_ニ我身_ハ本覺三身如來_ノ身體也。 周_ニ徧_{シテ}法界_ニ一佛_ノ徳用_ヲ一切_ノ法_ハ皆是佛法也云々。

と云へり。是れに依るに法界は一大圓佛なり。今是れを法報應三身に分ちて論ずるに、

一に法身に約すれば御義口傳下一に

惣じては如來とは一切衆生なり。中略 六即の配立の時は、此の品の如來は理即の凡夫なり云々。

と云へり。凡夫を以て本佛とするなり。會師祖書綱要刪略序文は

尋_ニ無始古佛_ニ而見_ニ理即凡夫_ニ覓_ニ本覺三身_ニ而得_ニ法界依正_ニ云々。

と云へり。是れ若し單に法身の體を抽象し來れば本覺如來とは理即の凡夫法性眞如の無用の境なり。

此の境に冥するの智用は報身如來縁に隨て顯現する形相は應身如來なり、一灌頂鈔一〇二八に

此品_ノ觀心_ト者妙法一心之如來壽量品_{ナルガ}故_ニ我等凡夫_ノ一念_ヲ。一念_ハ即如來久遠_ノ本壽本地無作_ノ三身本極法身_ノ本因本果_ノ如來也云々。

と云ひ、本尊鈔 九三九には

壽量品云々然我實成佛已來無量無邊百千萬億那由陀劫等云々。我等^ガ己心^ヲ釋尊^ハ五百塵點乃至所顯^ノ三身^{ニシテ}無始^ノ古佛也云々。

と衆生の一色身皆是れ本有無作の覺體、法界の依正、本佛體内の分身散體なるを以て、衆生の一色身當に妙樂大師の所謂一身一念遍於法界なり。此の遍於法界の我は本體の實在絕對の一佛なるを以て普遍常住の本佛なり。此の絕對者本佛中の相對者流轉なるを本佛の常住に約して十界乃至三千常住と立つるなり。

二に報身に約すれば報は性徳の果報なり。御義口傳下一〇右に

我とは釋尊の久遠實成道なりと云ふ事を説かれたり。然りと雖も、當品の意は、我とは法界の衆生なり、十界己己を指して我と云ふなり云々。

と云ひ、又下一七右

久遠とははたらかざず、つくるはず、もとの儘と云ふ義なり。無作の三身なれば、初めて成ぜず、是れ働かざるなり。世二相八十種好を具足せず、是れ繕はざるなり。本有常住の佛なれば本の儘なり。是れを久遠と云ふなり。久遠とは南無妙法蓮華經なり。實成^{マコトニシテタリ}、無作と開けたるなり云々。

と云ひ、又全下四三左

本門の心は無作三身を談ず。此の無作三身とは、佛の上ばかりにて之を云はず。森羅萬法を自受用身の自體顯照と談ずる故に、迹門にして不變眞如の理圓を明す處を改めずして、己己の當體無作三身と沙汰するが、本門事圓三千の意なり。是れ即ち櫻梅桃李の己己の當體を改めずして無作三身と開見すれば是れ即ち量の義なり云々。

と云へり。是れ法界一大圓佛性徳の果報にして三千常住は法の性徳なり。正報有情に約する時は、紅顔の美少年忽ちにして老翁となり、窈窕たる美人も無常の嵐に散り、又依報非情としても時に春夏秋冬あり、花は紅柳は緑に萬人鑑賞の的となれる春夏も一葉落つれば忽ち天下は秋を迎へ、やがて又一面銀世界と化する冬は廻り來らんも共に本有不改の性徳なれば此の流轉變現又げに何れの世にも止む事無き常住不變の性質なり。而して此の千差萬別の種々相は一大圓佛普遍常住中の部分流轉にして、能く現象世界を形造れり。

三に應身に約すれば正に佛界緣起を成するなり。聖密房御書一六六三に

久遠實成は一切の佛の本地譬へば大海は久遠實成魚鳥は千二百餘尊なり云々。

と云ひ、唱法華題目鈔三四二には

十方世界の三身圓滿の諸佛をあつめて、釋迦一佛の分身の諸佛と談ずる故に一佛一切佛にして妙法の二字に諸佛皆收れり云々。

と云ひ、開目鈔七九〇には

此過去常顯時諸佛皆釋尊の分身なり云々。

と云ひ、日眼女造立釋迦佛供養事一八三〇には

法華經壽量品云或説己身或説他身等云々。東方の善德佛、中央の大日如來、十方の諸佛、過去の七佛、三世の諸佛、上行菩薩等、文殊師利・舍利弗等。大梵天王・第六天の魔王・釋提桓因王・日天・月天・明星天・北斗七星・二十八宿・五星・七星・八万四千の無量の諸星。阿修羅王・天神・地神・山神・海神・宅神・里神・一切世間の國々の主とある人。何れか教主釋尊ならざる。天照大神・八幡大菩薩も其本地は教主釋尊也。例せば釋尊は天の一月諸佛菩薩等は萬水に浮ぶる影なり云々。

と云ひ、草木成佛口決七四五には

口決云草にも木にも成る佛也云々。此意は草木にも成り給へる壽量品の釋尊也。經云如來秘密神通之力云々。法界は釋迦如來の御身に非ずと云事なし。中略理の顯本は死にて有情をつかさどる事の顯本は生にして非情をつかさどる云々。

と云へり。以上諸文の意は法界唯一佛にして、十界三千の諸法は一佛の緣起なり。十方法界の諸佛は此の本佛の分身なるは勿論、九界の衆生乃至依報の國土も皆本佛顯現の力用なり。本佛の普門示現なり、本佛の別相なり。此の別相を外にして惣相に本佛なきなり。故に本佛は惣相にして無始の古佛、十界は別相にして此の惣別の關係を隨緣生起と云ふなり。經文此の無盡の形相の緣に隨て顯現する應用自在の妙を説いて、或説己身（佛界）或説他身（九界）或示己事（寂光土）或示他事（餘之三土）と有相可見の應身如來を説けり。

以上は法界一大圓佛を法報應三身に寄せて論ぜしものなるが、此の一大本佛は論理的には本覺が先在し心理的には始覺先立つたを以て、三身の別は抽象的分析にして事實は不可分の具體的な故三身同時顯發にして又究竟の旨歸は一極圓常の本佛なり。此の一大圓佛は本有なれば全體としては元來増減無く、現象としては非滅現滅非生現生の増減の妙用を示し、不變の靜寂と隨緣的活動との二面又唯心的創造性と唯物的因果律との兩面を一具せる本原的實在なり。御義口傳下二〇左に

如來とは三界の衆生なり。此の衆生を壽量品の眼開けてみれば十界本有と實の如く知見せり。三界之相とは生老病死なり、本有の生死とみれば無有生死なり、生死無ければ退出も無し、唯生死無きに非ざるなり。生死を見て厭離するを迷と云ひ始覺と云ふなり。さて本有の生死と知見するを悟と云

ひ本覺と云ふなり。今日蓮等の類ひ、南無妙法蓮華經と唱へ奉る時、本有の生死本有の退出と開覺するなり。又云く、無も有も生も死も若退も若出も在世も滅後も、悉く皆本有常住の振舞なり。無とは法界同時に妙法蓮華經の振舞より外は無きなり。有とは地獄は地獄の有の儘、十界本有の妙法の全体なり。生とは妙法の生なれば隨縁なり。死とは壽量の死なれば法界同時に眞如なり。若退の故に滅後なり。若出の故に在世なり。されば無死退滅は空なり。有生出在は假なり。如來如實は中道なり。無死退滅は無作の報身なり。有生出在は無作の應身なり。如來如實は無作の法身なり云々。と又全下一四右

自とは九界なり。此の十界は本有無作の三身にして來る佛なりと云へり。自も我も得たる佛來れり。十界本有の明文なり。我は法身、佛は報身、來は應身なり。無上寶聚不求自得之を思ふ可し云々。と云ひ又全下一七右

本有常住の佛なれば本の儘なり。是れを久遠と云ふなり云々。
等と云へる文は何れも久遠本佛は三身の本有常住。十界無作なる事を顯せる文なり。

第五節 始即本の成佛觀

始覺とは釋迦一佛の上に論すれば伽耶山麓菩提樹下の正覺であり、本門壽量品の説相に依れば五百

塵點本初實成是れなり。本覺とは始覺に依りて顯されたる所悟の境なり。能悟の智所悟の境に冥するを始覺即本覺とは云ふなり。本覺は性徳の三身、始覺は修徳の三身にして此の修徳の三身が性徳の三身に冥合して事相・事用の上に顯徳されたる果上證得の三身こそ我家の始覺即本覺の如來なり、台家は無作本覺佛を談ぜざるが故に事相隔隔理具の一念三千なり。その立行の如き六即五十二位を経て從因至果始めて三身を成ずる是れ迹門の始成の益なり。當家は本覺の理に依りて本門の行を立つるなり。能説の教主既に本覺を顯す故にその所説所化をして、前の迹門所成の三身に於てその儘三世常住本有の覺體なりと知らしむるなり。故に衆生本覺無作に歸して、事の一念三千十界互具を成じ、以て本門の行立ち、又その大益を得べきなり。御義口傳下九左に

唯だ凡夫の當體本有の儘を此品の極理と心得可きなり。無作の三身の所作は何物ぞと云ふ時、南無妙法蓮華經なり云々。

と云へり。此心得可きの智用は自體顯照なれば自身の本覺に冥して報身事成であり又應同教化に轉向するなり。日向記三一右に

此の九識法性とは、いかなる所の法界を指すや。法界とは十界なり。十界即諸法なり。此の諸法の當體本有の妙法蓮華經なり云々。

と云へり。此の本有の妙法蓮華經の當體こそ、十界の衆生・森羅の諸法・生住異滅の變相・方圓長短の殊狀灼燦として常住の本法なり。又三四右

本法と申すは、水があつくなり、火がつめたくならば流轉門なるべし。水はいつもつめたく、火はいつもあつく、地獄は何も火煩、餓鬼はいつも飢渴、其の外萬法己己の當位々々の儘なるを本法の体と云ふなり云々。

と又全三七右

本法の徳として水はくだりつめたく、火はのぼりあつし、此を妙と云ふ。此れ即ち不思議なり。法界の儘に闇いて妙法なりと説くを本法と云へり。火は水にきゆる本法にして不死なり。十界己々の當位々々の振舞常住本有なるを妙法とも不思議とも本法とも云へり云々。

と此の本有常住を覺知する事は始覺の用にして、その覺到する處は本覺の體なり。又三二右所詮一切智地をば、九識法性と心得可きなり。九識法性をば、迷悟不二。凡聖一如なれば空と云ふなり。無分別智光を空と云ふなり。此の九識法性とは、いかなる所の法界を指すや。法界とは十界なり。十界即諸法なり。此の諸法の當體本有の妙法蓮華經なり。此の事に迷ふ衆生の爲めに、一佛現じて分別説三するは、九識本法の都を立出づるなり。さて、終に、本の九識に引入する、夫れを

法華經とは云ふなり。一切智地とは是なり。一切智地は我等衆生の心法なり。心法即ち妙法なり。一切智地とは是れなり。云々

と以て始覺即本覺の妙處を知るべきなり。我家顯本の意義は十界事常住・法報應具足事の常住に在るなり。我等凡夫に就て是れを云はゞ日向記五左に

本因本果といふは、一念三千なり。本有の因、本有果なり。今始めたる因果に非ざるなり。五百塵點の法門とは此の事を説かれたり。本因の因といふは下種の題目なり。本果の果とは成佛なり。

因と云ふは信心領納の事なり。此の經を持ち奉る時を本因とす。其の本因のまゝ成佛ありといふを本果とはいふなり。日蓮が弟子檀那の肝要は、本果より本因とするなり。本因なくしては本果有る可からず。乃て本因とは慧の因にして名字即の位なり。本果は果にして究竟即の位なり。究竟即とは九識本覺の異名なり。云々

といへり。行の圓因圓果は人の始覺即本覺にして是れ我家成佛の理想とする處なり。若し單に本覺のみ論ずれば、本覺の家に成佛の語無く、眞如海の内には生・佛の假名を絶し、平等法會の中には自他の形相無く、言語同斷。心行所滅。無作法然空漠たる唯一絶對の境夫れ自體にして、何の行用覺知も無き畢竟單體無用の世界にして、極して論ずれば中道實相の抽象的概念に過ぎざるなり。故に本覺の境自

体をのみ抽象すれば始覺門成佛の行用を失すべきなり。然るに具体的・實際的には境の外に智無き故に、我身は此れ本覺果上に現象せる三身具足の如來なりと始めて覺知するを体用具足即身成佛とはいふなり。而して本覺を始覺せる程度の深淺換言すれば衆生の法悦の程度如何を計る妥當的標準性として設けられたるものが我家の六即の位なり。台家は因中所談なるを以て衆生所具の佛性の開發の程度如何を計るべき標準としての六即五十二位なるを以て究竟即を妙覺果滿成佛の位とせば台家流の心地行用にては永劫不成佛であるべきなり。何となれば理想は永遠に理想なり。若し理想を實現すれば最早現實なり。理想は現實より彼方にあるべきなり。依て理性所具の台家流の解釋に隨ふ時は成佛とは杳遠の彼方に在る理想なり。我家は果上所談なるが故に成佛の上に立てられたる深淺を計る標準なり。初めて我身は本覺の如來と悟る以前は因位の修行なり。自覺成りて願れば元より本覺の如來なり。此の自覺内心より僞らざる叫びとして現れて以後は最早不退轉果位に安住せる即身成佛者なり。此の人は永遠と普遍との人格的生命に合一せる人格なるを以て、自覺以後の行住坐臥悉くが一行一切行、一切行一行の心地を味へる者にして、應用自在の中に常に中心を把握し諸作悉く佛事たらしむるものなり。斯くて此の心地に至れば相對的に論ずる自力成佛に非ざる事を悟得するを以て、自力と思へる因中の修行のその儘に佛力なりし事を會得し、心地は九識本覺の上に立ち行住坐臥は六識に出發すべ

きなり。隨てその六識に出發する諸作と雖悉くが佛事であり、善美を歡喜や愛に表現し合理的・公正の眞を求むる生活であり、超眞善美の絶對第一義目標に向ふべき合目的々。合本覺の生活は展開せらるべきなり。彼のマルキシストの如きは心地を理想に置き、(彼等自身の學說に従へば觀念形態は物質の進行過程に生ずる陰影なりといふが此の物質の進行に安住し得ず革命へと急ぐ心理狀態を客觀的に觀察するならば)此の心地此の理想に萬物を反映せしめた特現實の如何に醜惡なるかに憤慨し革命へと急ぐ信念は宗教的なれどその様態明らかに因中所談なり。而して彼等の暴力革命に依て現れ来る社會は如何。彼等の學說の根底たる唯物論に依るも物質が永遠の進行である限りその陰影たる理想も亦必然的に永遠に進行すべきを以て、設ひ彼等の理想たる共產社會が此の地上に出現したりとするも恐らくは不満の情は再び涌出すべきなり。斯くて憤恨と理想の對立抗爭が人生なりとせばマルクス主義は遂に人生を救ひ得ざる結果となる事、台家流の永遠に妙覺を追慕して焦心の中に没し行く事唯物・唯心・客觀的・主觀的の相違こそあれ結果に於て同じきを觀るなり。我家の成佛は顯本に依りて十界事の常住を把握するにある故善惡・美醜・眞僞の存在を許容するものにして是れ又無始法爾常住である事を正しく認識し誤らざる様活用すれば事足るべきなり。是れを本尊に觀るも十界は悉く中尊の本有の光明に照されたる十界たるにあり。隨て壽量顯本(本佛の御名は南無妙法蓮華經)以前の因

中に在る時は素朴的十界、顯本以後の果上に在る時は本有の光明に照れたる十界なり。前者は單體無用後者は俱體俱用なり。是れを一個人に觀るも自覺に至る迄の修行所作は因中、自覺以後は果上、初めて自覺せる心地が即身成佛なり。果上以後の諸作は自行化他を問はず悉く佛事であり、その人の自覺歡喜の深淺の測定として我家の六卽は配立せらるべきなり。斯くて我家の成佛は人に約すれば始覺卽本覺、行に約すれば圓因圓果、教に約すれば本迹一致、理に約すれば唱題卽成なり。教行人理皆是れ始卽本を發現して宗義を成するなり。

第六節 三秘の原理としての三身

壽量文上能顯始覺に依て顯されたる文底無作三身は一体三寶の極理なり。卽ち本佛に約すれば無作三身、本法に約すれば妙法蓮華、本僧に約すれば一念三千を成すべきなり。壽量品は本佛に約して無作三身を談するが故に此の宗教的本佛觀が我家の本體觀なり。本法は十界常住依正本有を顯すを以て我家の宇宙觀、一念三千は觀心に約し、行者に約して談する故我家の人生觀なり、故に三寶互ひに融し、一を擧ぐるに卽三、体用周遍の故に依正互融し唯一不二なり。諸法唯一の故に体用俱に周遍なり。斯くて壽量所顯の本佛無作三身の秘体は卽ち是れ妙法蓮華の圓理又是れ一念三千の妙觀なり。三寶同時に顯發し同時に究竟の旨歸なり。是れ卽ち一体三寶にして事の三大事なり。御義口傳下九左に

無作三身の寶號を南無妙法蓮華經と云ふなり。壽量品の事の三大事とは是れなり云々。

と云ひ、三大秘法鈔二〇五四には

三大秘法は二千餘年の當初地涌千界の上首として日蓮慥に自教主大覺世尊口決相承せし也。今日蓮が所行は靈鷲山の稟承に芥爾計りの相違無き色も替へらぬ壽量品の事の三大事なり云々。

と云ひ、又全頁

壽量品云然我實成佛已來無量無邊等云々。大覺世尊久遠實成の當初證得の一念三千也。中略法華經を諸佛出世の一大事と說せ給て候は。此三大秘法を含たる經にて渡らせ給へばなり云々。

とも云へり。此の事の三大事は三大秘法にして、三大秘法とは一秘の南無妙法蓮華經の題目なり。神力別付の法とは此の一代秘法にして高祖開して三秘の妙行となす。今三身と三秘とは理教相對の關係にあり、無作三身は始覺所顯の三身なり、若し單に自然覺の上に論ずれば理體にして本有の境なり。本來不迷不覺の體なれば教ゆべき智用に非ざるなり。若し始覺卽本覺の覺用加はり來て境智冥合すれば茲に教ゆべき智(教)と教へられるべき境(理)とは初めて成立するなり。斯くて本覺佛の理體門は始覺の作用に依つて教道門に入り來り、迷悟因果を分ちて教行を分別し、眞の十界互具三千常住を教道門の上に論ずる事を得るなり。而して本覺三身は理體に既に法報應の三方面を具足せるが、教道門とし

ては三秘の法門として顯れ、次いで之の如く本尊・題目・戒壇となるなり。その關係は南無妙法蓮華經は本佛の寶號なり。三秘は此の題目より開出したるもの故惣別の關係を成立するなり。故に本佛より出でたる三秘は、三秘具足の唱題の妙行に依りて再び本法に還りて本佛と成るなり。惣より別を開し別は再び惣に歸す、是れ一体三寶の原理に基く我家の成佛なり。(未完)

原始佛教に於ける三藏の成立に就て

谷 田 亨 存

第一、現行佛教と原始佛教

今日現行の佛教は所謂發展佛教にして佛陀所説其儘の佛教に非ざる事言を俟たず。如何に吾が宗徒が此れ釋尊出世の本懷の教なりと叫ぶとも、釋尊が題目を唱へたるなりとは信ずる能はず。又如何に淨土宗の人々が佛教の本意茲に歸着するなりと主張すると雖も、釋尊が常に念佛を口にせるものなりとは考へられざるなり。凡そ現行佛教各派は假令大乘教(Mahayana 佛果を求むる教)にしても或は小